

---

# 《運命》あります

永坂 暖日

---

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『運命』あります

### 【Zコード】

Z8605M

### 【作者名】

永坂 暖日

### 【あらすじ】

胡散臭げな看板を掲げる店を好奇心からのぞき込んだ若者は、『運命』を売っている、と言う老婆と対面する。

「こっちだって商売さ。不良品は売っていないよ」老婆はそう言って笑つた。

## (前書き)

Web拍手のお礼用としてしばらく使っていた掌編を修正したもの  
です。自前サイトにあげることなく埋もれていたので、この場  
を借りて公開しています。

ある国のある街で月に一度開かれる市は、今月もにぎわっていた。周辺の村で獲れた新鮮な野菜や果物を売る店、色取り取りの布を売る店、はるか南の国から伝來した珍しい品物を売る店等々の数も多ければ、それ以上の数の品物が溢れていた。人の数もまたしかり。幅広なはずの大通りは、屋台のような簡素な店と市にやって来た人々でいっぱいになつていて、人にぶつからずに歩くのは難しいほどだ。

そんな市の中をふらりと歩く、一人の若者がいた。買い物をしようと思ったのではなく、ただ単に、月に一度の賑やかな場の空気を吸い込んで、自分への景気づけにしよう、と思つただけの若者である。金がないから欲しい物があつても買うことができないのだが、それでも、珍しい物を見るだけでそれなりに楽しめる。

買つつもりはないが、一軒一軒をいちいち冷やかしながら楽しんでいたその若者は、とある店先で足を止めた。ほかの店と違つて、その店には一人も客が寄りついていないようだつた。まるで皆がそこを避けて通つているかのように、店の前にはぼっかりとした空間ができている。

これだけにぎわっている市の中であつて、何故その店だけ客がないのか、若者は訝しみ、看板に目を向けた。そして、納得する。粗末な板切れが、やはり粗末な机に立て掛けあつた。板切れには文字が書いてあるから、きっとそれが店の看板なのだろう。その看板こそ、客が来ない原因に違ひなかつた。

板切れには、『運命』あります、と書かれていた。

「にいさん。一つどうだい？」

店のすぐそばで足を止め、看板を見ていた若者を田代とく見つけて声までかけてきたのは、その店の中にいた老婆だった。彼女が、『運命』を売つてゐるこの店の主らしい。簡素な店の中には、ほか

に誰もいなかつた。

無視して通り過ぎようかとも思つたが、珍しい物を見て楽しめため、今日はここへ来ているのだ。売り物が《運命》とは、確かに珍しい。だが、それ以上におもしろい、と興味をそそられた若者は、老婆の招きに応じるように、軒先から店をのぞき込んだ。

造りはほかの店と同じで、軒先に商品を並べるための台を置き、四方に木の柱を立てて天幕が張られている。たつたそれだけの簡素な店である。ただ、ほかの店とは違つて、台の上にはほとんど物が乗つていなかつた。

あるのは、四枚の黒い札だけである。

「ばあさん。もしかしてこの黒い札が、《運命》だつて言つのか？」若者はからかうような口調で、台の上の札を指さした。

「ああ、そうさね。この札を買えば、札に書いてある運命は、にいさんのものになる。どうだい。一つ、買ってみないかい？」

老婆は冗談とも本気ともつかない口調で、札の一枚をすつと差し出してきた。

「はは、面白いもんを売つてるじゃないか。だが残念なことに、金がない」

「なに、お代は金じやあないよ。お代は、にいさん自身の《運命》だ」

そう言つて老婆はにたりと笑つた。若者には、笑う老婆の瞳が怪しく光つてゐるよう見えた。しかし、それは一瞬のことと、老婆はまたすぐに、愛想の良い笑みを浮かべていた。怪しく見えたのは、氣のせいだったのかもしれない、と若者は思つた。

「これから先の未来、にいさんが歩むはずの《運命》と引き替えに、この札に書かれている《運命》を手に入れることができるのさ。どうだい、にいさん？ なあに、しつちだつて商売や。不良品は売つちゃいないよ」

と、老婆は一枚の札を、ヒラヒラと若者の前で振つてみせる。札は表も裏も真つ黒で、そこに何かが書かれているかどうかも分から

なかつた。

「今のご時世、いつ戦に巻き込まれないと知れないじゃないかい？ だけどここで『運命』を買えば、もつ安心だ。戦に巻き込まれることなく、幸せな人生を送れるよ」

市の中を見渡せば、武器や武具を売っている店も少なくはなかつた。いつ戦渦に飲まれるか分からぬ世情では、自分の身を守るのは自分だけ、といつわけである。

若者は、老婆の言つことを頭から信じてゐるわけではない。『運命』のよつな、目に見えないものを売り買いできるとも思えないし、そもそも、若者は運命の存在そのものを信じていなかつた。彼は、剣一本で『』の歩む道を切り開いてきた、といつ自負があつた。

それでも、気休めに老婆の売つている『運命』を買つてもいい、と思つた。どうせ目に見えないもので、しかも若者自身は存在しないと思つてゐるものだ。ほんのさわやかな気休めではあるが、ただならば、買つて悔やむこともない。

「おもしろい。一つ、買おう」

若者がそう言つと、老婆は「毎度あり」とひつひつ笑い、一枚の白い札を若者に手渡した。

「その白い札を、ここにある好きな黒い札と交換して、売買は終わります」

老婆は、台の上に乗つてゐる黒い札を、改めて横一列に並べた。黒い札は全部で四枚。端の札はなんとなく嫌だつたので、選択肢は自然と狭まる。右にするか、左にするか。

若者はわずかに迷い、そして、どうせ気休めならばどれでも同じだと思い直して、右から一枚目、左からは三枚目となる札を選んだ。その黒い札を取り、代わりに、白い札をそこに置く。

「これでいいのか？」

確かめるように老婆を見ると、老婆は満足げに頷いた。若者が置いた白い札を取つて一瞥し、何があつたのやら、また、にたりと笑う。

「これで、その黒い札に書いてある《運命》は、にいさんのものさ」  
氣休めとはいえ、ふと気になつて若者は尋ねた。

「どんな《運命》かは、教えてもらえないのか？」

「にいさんが買い取つたとはいえ、先のことなんて知らないほうが幸せだらう。なあに、心配することはないよ。商売だからね、不良品でないことは保証するさ」

老婆は、はぐらかすようにそう言つだけであつたが、氣休めと思つているものについてしつこく尋ねるのも馬鹿らしいと思い、若者は黒い札を懐にしました。

人混みに紛れ去つていく若者を見送ると、老婆はもう一度、白い札を手に取つた。

「不良品じゃあないけどねえ

」

にやりと口元を歪め、笑う。先程まで若者に見せていた、愛想の良い笑みではなかつた。

若者が買った黒い札には、そこそこ幸せな人生が歩める《運命》が宿つていた。この先、戦に巻き込まれることはなく、そして可もなく不可もない、凡庸な人生を歩む《運命》である。ほかの三枚も、似たり寄つたりだった。若者が売つてしまつた、彼の《運命》と比べれば、見劣りするものばかりである。

若者が、黒い札の凡庸な《運命》と引き替えにした、彼の生まれ持つた《運命》。それは、いずれ起きる大きな戦で武功を立て英雄になる、というものだった。

百戦錬磨、不死身、救国の英雄 様々な呼び名を授けられ、死後も永く人々の記憶に留まるはずであった《運命》を、若者は、ほんの気まぐれで手放してしまつたのである。

しかし、英雄となる《運命》を手放すことこそが、若者の本当の《運命》だったのか、あるいはねじ曲げられてしまつた《運命》だ

つたのか。

「これだから、人間をからかうのはやめられないねえ」

不幸になるわけじやあないんだし、これくらいはいいじやないかい

老婆は、まるで誰かに語りかけるように、咳いた。

それから、くつくつと楽しげに笑い、白い札にふっと息を吹きかける。札はたちまち黒い色に変わった。台の上にまた、四枚の黒い札が並ぶ。

「さあさ、『運命』はいらんかね」

月に一度の市で賑わう通りに、老婆の声が飲み込まれる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8605m/>

---

《運命》あります

2010年10月8日13時55分発行